

アーネスト・ヘミングウェイの未発表原稿に関する調査：『エデンの園』を中心に	
辻 裕美	比較社会文化学専攻
期間	2006年7月15日～2006年7月29日
場所	アメリカ ポストン
施設	ジョン・F・ケネディ・ライブラリー

内容報告

(a) 海外調査の必要性和その目的、調査の成果

本調査では、ポストンの「ジョン・F・ケネディ・ライブラリー」において、アーネスト・ヘミングウェイの死後出版作品である『エデンの園』(*The Garden of Eden*, 1986)の未発表原稿の調査を行なった。本作品は、商品化されたヘミングウェイのイメージに基づいて、作者の死後、編者や遺族等によって、原稿の3分の1の長さにあたる約13万語が削除され、大幅に編纂された後に出版されている。このことから、現在出版されている『エデンの園』は作者が描こうとした作品の原型を留めているとはいえない。『エデンの園』においては異性愛規範から逸脱した性が削除されていることから、抹消された箇所への分析は、本作品、並びにヘミングウェイ作品全体のジェンダー研究において、見逃すことのできない重要な意味合いを包含している。本調査の目的は、未発表となっているヘミングウェイの手書き原稿やタイプ原稿を入手し、『エデンの園』から削除された原稿の分析を通して、ヘミングウェイ作品のジェンダー・セクシュアリティ研究に新たな解釈を導き出すことである。

現地調査において、ヘミングウェイの約1600枚の手書き原稿が存在することが判明し、今回の調査では、そのうち約1000枚の原稿の調査を行なった。出版された『エデンの園』には、一組の夫婦(ディヴィッド・ボーンとキャサリン・ボーン)と一人の女性(マリータ)が登場する。ディヴィッドとキャサリン夫婦の間にマリータが介入することで、二人の女性は同性愛の関係になるが、キャサリンが精神不安定に陥り、姿を消した後、マリータとディヴィッドの異性愛カップルが最終的に結ばれることになる。しかし、本海外調査を介して、未発表の原稿では、ストーリーはさらに複雑に錯綜して展開しており、「異人種混交」や「性役割の交換」、「同性愛」等の願望が判然と描き出されることが明らかとなった。さらに、これらの願望を具

現化させる「変身/変容」が作品の主要テーマであったことが明瞭となった。ある日、新婚のキャサリンは「びっくりすること」を思いついたと言い出し、突如、長い髪を男の子のような短髪に刈り込む。猟師の服を身にまとい、極度に短い髪をしたキャサリンの行動は、1920-30年代当時、彼らの滞在する田舎街では、町中の人が奇異の眼で眺めるほど逸脱したものであった。このようなキャサリンの規範を侵犯するような行動は、物語が進むにつれ一層エスカレートしていき、ディヴィッドと性役割の交換を提案するに至る。ディヴィッドとキャサリンが性交渉を持つ場面では、キャサリンは、本作品の主要テーマである「変身/変容」を暗示する発言をする。“Do you remember the sculpture in the Rodin museum?” (422.1-1) キャサリンが示唆するロダン美術館の「変身」(metamorphoses)像とは、レズビアンだと推察される二人の女性が抱擁する彫像である。キャサリンはこの像にジェンダー・アイデンティティの変容を読み取っていると考えられ、この言及の後、キャサリンとディヴィッドは性交渉において、初めて性役割の交換を試みる。目を閉じたディヴィッドが身体の上に乗るかかるとキャサリンの重みを感じた後、身体の中に奇妙なものが入るのを感じているが、これら一連の記述から二人がソドミーを行なっていることが示されている。性交渉後、ディヴィッドはあの「変身」像みたいだったと感じている。ロダンの「変身」像に関する描写は原稿から一切抹消されているが、この編集には編者のある種の意図が見え隠れする。一つには、二人の性交渉がレズビアンを暗示するロダンの彫像からインスピレーションを得たという点、もう一つは、二人がホモセクシュアルな性交渉を暗示するソドミーを行なっていることを婉曲的に表現するという点である。

主題とも大きく関わるロダンの「変身」像の叙述を、一切削除しなければならなかった編者の意図は、「変

身」像が暗示する同性愛的欲望を隠蔽することであったと考えられる。これらのことは、性役割交換後のディヴィッドの変調に関する描写が消去されていることから推測できる。原稿では、キャサリンとの性役割交換の後、ディヴィッドの声が幾度もかすれ、彼が漠然とした不安を抱き始めていることが描かれている。“His voice felt thick when he spoke... His voice was thicker... He was very worried now...” (422.1-1)ディヴィッドのこの戸惑いが一体何を示唆するかは、キャサリンの男性化願望と対比してみると、明確に理解することができる。髪型を短髪にし、スラックスを身に着け、自身を「ピーター」と名乗るキャサリンの変身願望が、マリータとの恋愛によって同性愛的な欲望、つまりレズビアン的な欲望であることが明らかになる。一方で、ディヴィッドの場合はどうだろう。男性の性役割を担い、「ピーター」と名乗るキャサリンから自身と同名の「キャサリン」と命名されたディヴィッドは、女性の性役割を担うことになる。性役割を交換し、ソドミーを行なう二人は、その「変容/変身」に快楽を見出すようになる。しかし、ディヴィッドは、ジョン・ボイル大佐にキャサリンとの性役割交換（ソドミーを行なっていること）が暴露されたことで、激しい後悔に苛まれるようになる。ディヴィッドの一連の不安感とは、単にディヴィッドの女性化された位置によるものではなく、ソドミーによって露見される彼のホモセクシュアルな欲望に対する不安だと解釈することができる。編者には、キャサリンとディヴィッドの性交渉があくまでも、異性愛間の性交渉の逸脱形として見せかける意図があったことが窺え、「変身/変容」というジェンダーを越境するテーマを多い隠すことで、特にディヴィッドに関わる同性愛的欲望やそれにつながる不安が意図的に隠蔽されたと考えられる。

さらに、作品解釈の手がかりとして、原稿から完全に抹消されたもう一組の夫婦ニック・シェルダンとバーバラ・シェルダンの描写に着目することができる。民兵に隠れてニックが飲ませるアブサンの描写は、キャサリンとディヴィッドがこのシェルダン夫妻によって、禁断の世界へと導かれていくことを暗示する。「悪魔の酒」と呼ばれるアブサンは中毒や幻覚、精神異常などの症状を引き起こすために、諸各国で売買が禁じられており、『日はまた昇る』を始めヘミングウェイ作品では、しばしば「不毛」や「快樂」、「違法性」のモチーフとして用いられている。水を加えると緑色から乳白色へと変色するアブサンはまさに、『エデンの園』ではタブーを犯す「変身」のイメージそのものである。「これまで決してしたことの無いような事を簡単にさ

せてしまうのよ」とバーバラが語るその効果からは、アブサンはエデンの園でイヴが口にした禁断の果実を暗示していると指摘できるだろう。

シェルダン夫妻との出会いによって、キャサリンとディヴィッドは人種越境願望、性役割の交換、同性愛願望などの様々な欲望を刺激されることになる。キャサリンは、ニックとバーバラを目にした際に、何か奇妙な感覚を抱いている。“It was so frightened when I saw them... It made me absolutely hollow feeling. It was like a fright and a great joy.” (422.1-4) 浅黒く日焼けし、肩まで髪を伸ばしたニックは、「傭兵」や「濡れた居留地のインディアン」や「インド人水夫」に似ていると繰り返され、ニックの容姿は人種越境的なものとして形容される。『エデンの園』の削除された原稿に記されているキャサリンの人種越境願望、つまり、キャサリンが日焼けを繰り返し黒人やカナカ人（南洋諸島の先住民）のようになりたいという願望は、ステレオタイプに基づく性的逸脱願望と密接に関連している。キャサリンにとって、白人種以外の人種のように見えることこそ、性規範からの逸脱を意味するのである。黒い肌をしたニックの異人種風な容姿は、キャサリンの変身願望を具現化したような存在だと言えることができるだろう。また、バーバラと同じように肩まで伸ばしたニックの髪にも、キャサリンは幾度も目を奪われている。『エデンの園』では「髪」がジェンダー変容の一つの手段となっており、バーバラとニック夫妻の髪型は、彼らのジェンダー・アイデンティティの不確かさを示すものだと読み取ることができる。二人が倒錯的な関係を持っていることが暗示されていることは、バーバラのキャサリンを見つめる同性愛的な眼差しからも読み取ることができる。

今回の調査によって、ニックとバーバラに関する箇所が、『エデンの園』の原稿から最も大幅に編纂された箇所であるということが判明した。ニックとバーバラの存在が原稿から単に消し去られるだけではなく、彼らの発言や所作がバラバラに切り刻まれて、ディヴィッドやキャサリンの発言や行動の一部として組み込まれていることが明らかとなった。つまり、バーバラやニックの発言が、出版されたテキストでは、時にキャサリンの発言として、時にはディヴィッドの発言として改編されている。これ程までに奇異な編集は、何を意図して行なわれたのだろうか。様々な規範の侵犯を試みるこの二組の夫婦は執拗に肌を黒くすることを試み、互いに同じ髪型にしようとするなど類似点が多い。しかし、これら夫婦の決定的な描写の相違点は、シェルダン夫妻の描写では夫ニックの人種越境性や、髪を

伸ばす姿から女性化された男性像や同性愛的欲望が一層明確に示されている点である。出版された『エデンの園』においては、バーバラの抱く同性愛的欲望はそのままキャサリンに投影されるが、ニックの持つ人種越境性や女性性、同性愛的欲望などは一切デイヴィッドに反映されることはない。つまり、キャサリンとデイヴィッドのその後の変容を予期させるシェルダン夫妻の存在から、特にデイヴィッドの変容を暗示し、人種のかつ性的な越境を触発するニックの存在が意図的に削除されたと考えられるのだ。今回の調査によって、編者トム・ジェンクスの編纂の真意は、マッチョな作家ヘミングウェイの商品化されたイメージを壊さないように、作者を連想させる戦争経験のある若き作家デイヴィッドの同性愛願望を示唆する箇所を削除することであったと結論づけることができるだろう。

(b) 博士論文における本海外調査研究の位置

博士論文では、ヘミングウェイ作品における身体、ジェンダー、セクシュアリティの表象分析を研究テーマとする。博士論文は四つの章で構成されており、第一章では「再生産」、第二章では「家族制度、性規範、同性愛」、第三章では「医学とマスキュリティ」、第四章では「戦争と性」についての分析を行なう。『エデンの園』の未発表原稿の調査は、第二章の研究に位置づけられる。『エデンの園』においては異性愛規範から逸脱した性が削除されていることから、削除された箇所の分析はヘミングウェイ作品全体のジェンダー研究において重要な意味合いを包含する。

博士論文の第一章では、ヘミングウェイ作品における「再生産」にまつわる表象の研究を行なった。「エリオット夫妻」(“Mr. and Mrs. Elliot,” 1925) では、性や生殖、ジェンダーについて、作品が書かれた文化的・歴史的背景に鑑みて分析を行なった。必死で子作りに励むエリオット夫妻を描くことを介して、ピューリタニズムの皮相的な文化規範を揶揄した一種のカリカチュアとなっている。アメリカ文化に深く根ざした禁欲的な道德観と、より自由で解放的な 1920 年代の性観念の対立がアイロニカルに描き出されている。また、風刺的要素に加え、異性愛規範に収斂されない多様なセクシュアリティが描かれている。レズビアンズムを暗示するエリオット夫人と年上の女友達の関係は、結婚制度を隠れ蓑にしつつ、その制度自体を空洞化していることを示している。ヘミングウェイが 20 歳代の頃に描いた「エリオット夫妻」は、性規範や家族制度、ジェンダーに関する問題意識が顕著に現れているが、これらは後の作品においても繰り返し描かれるテーマとな

っている。

第二章では、「家族制度、性規範、同性愛」に関する表象分析を行なう。『エデンの園』では、社会の規範を犯す欲望にとりつかれた登場人物たちが描かれている。髪を短く刈り上げ、髪の色を脱色し、肌を黒く焼くなど様々な「変身」を試みることで、「性差」、「強制的異性愛」、「異人種混交」に関する規範の侵犯を試みる。彼らの倒錯的な行為は、ジェンダー・アイデンティティの不確かさを暴露していくことになる。本海外調査によって、逸脱した性描写、特に男性主人公の同性愛願望が意図的に編者によって隠蔽されていたことが明白となったことから、研究の方向性として、ヘミングウェイ作品における男性同性愛願望の慎重な読み直しを図る。特に『エデンの園』と同様に「変身/変容」をテーマとする「海の変容」(“The Sea Change,” 1933)の分析を進める。作品のタイトル「海の変容」とは、海の底に沈む王の骨や目が、珊瑚や真珠へと変容する様を詠ったシェイクスピアの『あらし』に由来し、作品では男性主人公フィルのセクシュアリティの変容、つまり同性愛への目覚めが描き出されている (Young, 178-79)。女性からレズビアン恋人の存在を告げられ、フィルは同性愛への嫌悪感を示すが、彼の倒錯性が女性に指摘された後、別れを承諾する彼の声や外観には変化が生じている。鏡に映る自身が別人のように感じるフィルの言動や、同性愛者だと推察される二人の男性客の方への移動などから、フィル自身が同性愛的欲望を受け入れたことが示唆されている。

ヘミングウェイ作品には、『エデンの園』や「海の変容」以外にも、ジェンダー・アイデンティティの変容をめぐる作品が数多く描かれている。本海外調査では、「変身/変容」のモチーフが、ナルキッソスやピグマリオン逸話を含むギリシャ神話のオウィディウスの「転身譜」に依拠していることも判明した。今後は、ジェンダー・アイデンティティの変容に関する作品を網羅的に分析する上で、「転身譜」にも依拠しつつ、研究を進める。

第三章では、二章で言及したジェンダーの構築性というテーマを受けて、ヘミングウェイ作品における「医学とマスキュリティ」に関する分析を行う。『武器よさらば』(A Farewell to Arms, 1929) では、権力の装置としての医療行為を介して、医療従事者がある種の特権的な地位を築いていることが示されている。しかし、医療従事者自身の身体が触まれていく際や、妊婦の身体を前に医療の限界が明示される際には、堅固であるはずのマスキュリティの揺らぎを読み取ることができる。『武器よさらば』では、マスキュリティの不確

かさが露呈されていくことで、結果としてマスキュリニティが構築性が示されている。他のヘミングウェイ作品においても、医師など知を有する白人が先住民に対する医療行為を介して、優位な立場を築いていく場面がしばしば描かれている。「インディアン・キャンプ」(“Indian Camp,” 1925) や『夜明けの真実』 (*True at First Light*, 1999) といった作品における医療行為とマスキュリニティ構築との関連性についての分析を進める。

第四章では、「戦争と性」に着目して、戦争によるジェンダー配置の変容について分析を行なう。第一次世界大戦に従軍したヘミングウェイは「失われた世代」として、戦争後の混乱した世界を描いている。『日はまた昇る』 (*The Sun Also Rises*, 1925) では、戦傷を負ったジェイク (男性器を失った男性) と、第一世界大戦後に登場し始めたフラッパーであるブレット等の故国喪失者が描出されている。戦争がいかにか、ジェンダーや性規範を変容させていくのかという点を、身体表象に着目しつつ分析を進める。

(c)

本海外調査…博士論文の二章に位置づけられる。

つじ ひろみ／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 比較社会文化学専攻

【指導教員のコメント】

本海外調査研究は、日本では現在、入手不可ながら、アーネスト・ヘミングウェイのジェンダー／セクシュアリティ研究には不可欠である死後出版された著作『エデンの園』の、編纂前の作家の手書き原稿およびタイプ原稿を閲覧・調査し、編者や遺族などによって削除された部分 (原稿のほぼ3分の1) を分析・検討するものである。この調査研究により、削除部分における人種越境的視点および男性同性愛への近接性が明らかになり、編纂公表後のテキストとの比較研究によって、一般的なヘミングウェイのテキスト解釈から、さらに踏み込んだイデオロギー分析が可能になった。本調査研究の成果は、学会発表や投稿論文として公表するとともに、博士論文においては第二章「家族制度、性規範、同性愛」のテーマに直接的に連動すると同時に、他の章でも、「マスキュリニティ」「ホモソーシャルリティ」のテーマの追求に貢献する有意義なものである。

(文教育学部 教授 竹村 和子)

学会発表の予定…2007年5月19日

日本ヘミングウェイ協会ワークショップ 於：慶應義塾大学

論文投稿の予定…2008年1月 『ヘミングウェイ研究』第9号

参考文献

- Hemingway, Ernest. *A Farewell to Arms*. 1929. New York: Scribner's, 1957.
- . "Indian Camp." 1925. *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*. New York: Scribner's, 1987.
- . "The Garden of Eden." 1986. New York: Scribner's, 1995.
- . "The Sea Change." 1933. *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*. New York: Scribner's, 1987.
- . "The Sun Also Rises." 1926. New York: Scribner's, 1954.
- . *True At First Light*. New York: Scribner's, 1999.
- Moddelmog, Debra A. *Reading Desire: In Pursuit of Ernest Hemingway*. New York: Cornell UP, 1999.
- Young, Philip. *Ernest Hemingway: A Reconsideration*. University Park: Pennsylvania State UP, 1966.